おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和６(2024)年
９月号
通巻 649 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和６年９月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

長岡まつりの大花火　　齋藤　正宏さん撮影（文・４頁）

私とおおやまと
30年の時を超えて（当時と現在）〈第３回〉

現在武術家として大活躍されている甲野善紀さんも、30年前に「私とおおやまと」というテーマで本紙に寄稿されています。今回も大倭との出会いについての思い出を熱くつづっていただきました。（編集部）

〝変わらない〟こと（再録）

東京都多摩市　甲野善紀

私が初めて大倭紫陽花邑を訪れ、矢追日聖法主と大倭一門の方々にご縁ができてから、今年（平成六年）で十五年を迎える。初めて大倭に伺った時は、私が武術稽古（けいこ）研究所を創ってまだ一年経っていなかった頃であるから、大倭と御縁ができて以来の歳月は、そのまま武術稽古研究所の歩みでもある。

御縁のできたキッカケは、現在、関西気功界の文字どおり重鎮である津村喬氏から大倭の話を耳にしたためであるが、大倭に伺ってから、法主様と私の武術の母流儀ともいえる鹿島神流の国井道之師範とが、きわめて親しい間柄であったことを知り、驚くと共に、この大倭とは浅からぬ御縁であることを予感した。

――そして十五年。この間、私は数多くの貴重な出会いに恵まれ、改めて振り返ってみれば、「これが我が身に起ったことか」と半ば信じられぬ思いがするほどの展開があった。

だが、私個人の「一人の人間としての思い」は当時と全く変わっていないつも

りである。そしてこの〝変わらない〟ということに関しては、大倭紫陽花邑も全く同じように感じられるのである。

もちろん、この十数年の間にいくつもの近代的建物が建ち、風景は激変した。しかし、この邑に住む人々の雰囲気は、私が初めて御縁をいただいた時と、全く変わらぬ柔らかさをもって、ゆったりと流れている。

この独特な大倭の空気は、もちろん矢追日聖法主を中心に産み出されているのであろうが、この法主様の雰囲気と相和した、大倭の長老方の存在も、少なからずこのやわらぎの空気を産み出すことにかかわっておられるような気がする。

例えば、青山日元翁が、今は亡き森下新蔵すさのお会々長と禊会の折、やりとりをされていた情景は今も鮮やかに瞼に焼きついている。

あの時の間の取り方と言葉の抑揚は、まるでアドリブの能か狂言を見ているような絶品の対話で、これがあらかじめ台本が決まっていない、全くそのままの会話であることが到底信じられないような、現世離れした見事な場面であった。

現在のような手軽なビデオカメラの普及がこの年代には間に合わず、あの情景が記録に残っていないのは、かえすがえすも残念である。

とにかく、故森下会長も、青山日元翁も会ってお話しさせていただいていると、その折々のきわめて日常的な挨拶や会話の一コマ一コマが絵になっていて、何ともいえぬ不思議な感動を覚えた。

そこには、信仰とひきかえの現世利益に魂を奪われ、ロボット化した信者とは、およそかけ離れた信仰者の姿があった。

大倭には信仰を持つことにより、日常が非日常的な作品となり、非日常と思われがちな信仰が日常のものに還元されている、宗教者としてのあるべき姿の一つが明示されているように思うのである。

溢れる思い（現在）

私が初めて大倭紫陽花邑に伺ったのは、今から45年前の1979年の4月だったと思う。確かブラジル育ちの日系人の女性が一緒だったが、この女性は私が当時東京神田で行なっていた稽古会に出ていて、たまたま私が関西方面に行くことを聞いて、どこかで合流し、一緒に大倭に行ったと記憶しているが、その後の消息はわからず、名前も忘れてしまった。

紫陽花邑ではどなたと最初にお話ししたかは憶えていないが、教務所でフェイス出版から刊行されていた『紫陽花邑』の本を購入して、学園前駅にバスで戻る車中だったかで、この本の中に大倭紫陽花邑の矢追日聖法主が鹿島神流十八代を名乗られていた国井道之（本名善弥）師範とかなり深く縁がおありだったことを知り、「これは何ということだ！」と思って、学園前駅で同行していた女性と別れ、私は再び紫陽花邑に引き返し、恐らくはかなり興奮した口調で引き返してきた理由を杉本順一氏だったかに説明させていただいたのだと思う。

そして、しばらく待ってだったか、すぐにだったかは記憶から抜けているが、矢追日聖法主のご自宅に杉本氏に案内していただいて伺ったと記憶している。そして、そこで初めて矢追日聖法主にお目にかかった。第一印象は何と言ったらいいのだろうか、「ああ、この方は信頼できる」という、何とも言いようのない親しさと尊敬の思いが自然と湧き上がり、「この矢追日聖法主は今までお目にかかった人たちの中でも数少ない『人生の師匠』と呼べる方だ」と確信した。

いろいろなお話を伺ったが、その中にはもちろん私が学んでいた鹿島神流の剣術を世に出した国井道之師範に関するものもあり、「あの人は、技は人間国宝なんやが、なんせ気が短くてなあ……」と、その人柄について、またその凄まじい技の威力について、いくつもの思い出話を聞かせてくださった。

そして、そうした話をある程度聞かせてくださった後、ごくさりげない感じで「あんたはなあ、ここに一人で来てると思ってるかもしれんが、あっちの端からこっちの端まで（矢追法主は手を上げられて、私の背後の左端から右端を指されて）ずらっと眷属連れて来てるんやで、こんなん国井さん以来やなあ。どうやらあんたは、よほど武の因縁があるようやから、まあ大変かもしれんが頑張ってなあ」と、私に向かって淡々とした口調で告げられたのである。

この時の驚きと嬉しさと「ああ、やっぱりそうなんだ」という納得感が同時に湧き上がってきた感動は、45年経った今でもハッキリと記憶しているから、よほど心の奥底深くまで届いたのだと思う。当時日本中で私に関心を持っている人など30人居たかどうかという殆ど無名の存在だった私が、ただならない武の因縁を背負っていることを見抜かれた矢追日聖法主の慧眼には、今改めて感じ入るばかりである。

この時から45年の年月が経ち、現在の私は電車の中や道を歩いていても見知らぬ人から「甲野さんですか？」とか、「甲野先生ですよね。本を読ませていただいております」と声をかけられることがしばしばあり、時には一日の間に2回以上挨拶され、握手を求められたりすることがある。恐らく矢追日聖法主は、そういう私の未来をかなりハッキリと感じられたのだと思う。この1979

年の4月にシッカリとつながった大倭紫陽花邑とのご縁は、以来ずっと今日にまで及んでいる。

ただ、古稀を5年前に迎えてから、私の多忙さはそれまでにも増したものとなり、以前のように年に2回あるいは3回と紫陽花邑に伺うことも出来なくなっていたが、昨年は久しぶりに11月、12月と続けて大倭紫陽花邑で私の講座などをさせていただき、大倭の方々との昔と変わらぬご厚情に、何とも言えない懐かしさがこみ上げてきた。

今年2月16日の大倭でのワークショップで

今回、編集部の岸田哲氏から『おおやまと』への寄稿を求められ、もちろん喜んでお受けし、ここまで一気に書き進めてきたが、この先となると、さまざまな思い出が一気に溢れ出してきて、いったい何をどう書いたらいいのか分からなくなってきている。そこで、とにかく思い浮かぶままに書いてみたい。

私が大倭紫陽花邑に関わって、私自身もだが、他の方々の記憶にも残るようなことを行なったとすれば、それはかつて（といっても100年ほど前）、日本中の耳目を集めた新宗教「皇道大本」（現在「大本」として知られている）の聖師と呼ばれ、毀誉褒貶が凄まじかった「出口王仁三郎」の孫に当たられる出口和明先生（大河小説『大地の母』の著者で、この『大地の母』は大本開祖・出口なお、出口王仁三郎らの実録伝記小説で、私が独自に武術の研究を始めることに関して、最後に背中を押してもらった本でもある）と、その身近な方々とを、大倭紫陽花邑の矢追日聖法主を始めとする一門の方々にお引き合わせしたことだろうか。

そのことがキッカケとなって、現在も出口三平氏（この方も『大地の母』に惹かれて出口和明先生を訪ねられ、出口王仁三郎聖師の子孫の方の許に婿入りされた）は大倭の方々と親しく交流されている。

それにしても人の縁というのは誠に不思議なものである。その例として思い浮かぶことは、大倭に伺うようになって何年も経ちながら、ついに一度もご挨拶することもなく、本当に一言も言葉を交わすことのないうちにこの世を去られてしまった、この大倭紫陽花邑の大幹部の方がいらっしゃることである。その方は柴地則之氏。

私が大倭に伺うようになって、何かの折にチラッと遠くにいらした時、ご一緒したことがあったのかもしれないが、日頃、紫陽花邑にいらっしゃることがほとんどなく、この教団維持のため、外でいろいろと活動をされていたとのことで、いつかは御紹介を受けてお話ししたいと思っていながら、その機会が来ないうちに、まだ40代という若さで突然亡くなってしまわれたのである。

なぜ一度も会ったこともない、この方の印象が強く私の中に残っているかというと、私がもう何度目になるか、おそらく十数回目に伺った頃だと思うが、関西で講習会があって、私がたまたま大倭に伺った1週間ほど前に柴地氏が他界されていたのである。その柴地氏がどれほど大倭にとって重要な方であったかは、現在の拝殿完成の時にも耳にしていたし、さきほど述べたように、いつかは親しくお話ししたいと思っていた。

しかし、このような大倭への功績以上に、柴地氏のことが強く私の記憶に残っているのは、杉本順一氏が柴地氏を亡くされたその悲しみと喪失感を私に語られた時の様子があまりにも印象的だったからである。私も今まで生きてきて、人が人の死を悼む様子に触れて、あれほど深く心を打たれたことは、ちょっと他に例がない。

私が大倭に伺って、この話を聞かせていただいた時は、先ほど述べたように柴地氏が亡くなられて1週間ほど経っていたので、杉本氏も少し落ち着かれていたため、より冷静に親友を亡くされた悲しみを語ってくださったが、柴地氏が亡くなられた直後は、まさにハラワタが千切れるほどの悲しみで、悲しみというより凄まじい肉体的苦しさだったとのこと。肉親である父の時は覚悟も出来たし、十分生きたということもあって、冷静に見送ることが出来たけれども、今回はまったく夢にも思っていなかった不意のことだけに、人間ここまで苦しい思いをしても、まだ生きているのかと、自分が元気であることがうらめしく思われた……といったようなことを私に語られた。

その時、私は人が本当に人を悼むというのはこういうことではないかと思った。どんな香典や花束よりも、我が身が生きていることをうらめしく思うほど、亡くなった人のことを想うというほどの餞はないように思う。

この時、私は「この悲しみが信仰の力で軽く済むなどという事が宗教のおかげなどという事は絶対に違うな」と、本当に深く、深く実感したし、この杉本順一氏の悲しみに接したことが、私の中で一層大倭に対する信頼感を増したようにも思う。

宗教とか信仰という話になった時、私自身の中で最も印象深く心の中に浮かび上がってくるのは、やはりこの大倭紫陽花邑である。この大倭で私はそれまでの私の人生には一度も体験したことのない不思議な体験をいくつかした。例えば禊会で自分の意志とは関係なく口が勝手に喋り出す「口

を切る」という体験や、両手が自動的にさまざまな印を猛烈な速さで結んでいったり、「鶏が人間ぐらいの大きさになったら、あんな声も出るだろうが、人間にこれほど大きな声が出せるのか」というほどの大声で気合をかけたりといったこと。また、名古屋から来られていた、確か苗字が山田さんという和服姿の、当時60代くらいだったかの女性は「ミヤマルさん」という狸が憑くと、みるみる腹部が膨らんで臨月の女性のような体格となり、会が終わって「ミヤマルさん」が居なくなると元の体格になるという不思議な光景は今もよく憶えている。

また、以前この『おおやまと』紙にも書かせていただいたが、禊会や他の何かの集まりの際の青山日元翁と森下新蔵・すさのお会会長が出会われると始まる御二人のやりとりは、まさに狂言の舞台を見ているようで、別に台本もない、ある面では普通の内容の会話を、こんなにも浮世離れしたやりとりとして現代という時代に行なえるということ自体、本当に無形文化財、つまり人間国宝だと思った。

まだまだ大倭紫陽花邑の思い出はいくつもあるが、紙数も尽きようとしているので、この辺りで今回は終りとさせていただくことにしたい。

混迷をきわめる時代となり、どう生きるかが厳しく問われている現在、改めて信仰というものの在り方を各人が問うべき時になっていると思うのだが、世の中の人たちは、この問題についてどう考えているのだろうか。

表紙写真によせて

齋藤　正宏

写真は、2018年8月に行われた「長岡まつり」大花火大会の模様。日本三大花火大会の一つとされ、例年、100万人規模の観客でにぎわう、3日間の熱い催しとなっている。

まつりの花火は白一色の正三尺玉（「白菊」）3連発から始まる（「平和祭」）。直径650mに及ぶ大玉花火には、その1発毎に、「慰霊」「復興」「平和への祈り」の思いが込められているという。

昭和20年8月1日、午後10時半。新潟県長岡市は、テニアン島から飛来したB29爆撃機125機による空襲で灰燼に帰し、死者1488名を数えた（＊1）。そのため、大玉花火の1発目は戦争犠牲者に手向ける慰霊として、8月1日の午後10時半に打ち上げられる。

2発目の花火は、「復興」に尽力した人々への感謝として打ち上げられる。それは、空襲の焼け跡からの復興だけでなく、2004年に発生した新潟県中越地震（＊2）からの復興と支援にも手向けられている。

3発目の思い「平和への祈り」は、長岡市が、真珠湾攻撃を提唱・決行した山本五十六連合艦隊司令長官の郷里であることに由来する（＊3）。

2012年3月4日。「白菊」3連発を皮切りに約1400発の長岡花火が、米国ハワイ州オアフ島のホノルルで打ち上げられている。両市を巡る戦争の因縁を超え、「国際平和」を祈念しての花火であった。その2日前（3月2日）、ホノルル市と長岡市は姉妹都市となり、以来ホノルルフェスティバルでは、パール・ハーバー（真珠湾）の夜空を彩る長岡花火が恒例となっている。

こうした変遷を振り返りつつ花火を眺めていると、幕末の長岡藩を率いた傑物が思い起こされた。

1人目は、非戦中立の世を夢見て、官軍（薩長）方でも、幕府方でもない、共存共栄の道を目指しながら、北越戊辰戦争で斃れた長岡藩の若き家老、河井継之助。

2人目は、戊辰戦争で灰燼に帰した長岡藩に寄せられた見舞の米百俵を、藩士に分配せずに売却し、藩を立て直す人材育成のための学校設立に充ててしまった小林虎三郎である（「米百俵」の精神）。

他者との共存を希求し、地域を担う人材の育成を、人々の暮らしを救う手立てと見据えてきた長岡人の血脈が、この大花火の中にも受け継がれているのだろう。（了）

（＊1）同年3月の硫黄島玉砕により、日本は本土空襲への盾を失った。米軍によって接収・拡張された旧元山飛行場は、B29が被弾や故障、燃料補給のために立ち寄る基地となり、長岡空襲を行った爆撃隊も、37機が緊急着陸したとの記録を残している。

これに先立つ7月20日、長崎の原爆と形を似せた「模擬原爆」（通称パンプキン爆弾）が長岡市に落とされ、4名が犠牲となっている。新潟市への原爆投下を想定した爆撃訓練であった。

（＊2）最大震度7。新潟県内の避難者は最大約10万3000名に達した。旧山古志村の全住民が、役場も含め、村ごと長岡市に避難したのも、この地震である。

（＊3）強大な生産力を誇る米国との戦争に反対だった五十六自身が、戦端を開く役を担わねばならなかったのは、歴史の皮肉である。

母校の旧制長岡中学校（前身は、米百俵で創設された国漢学校）での講演『事變下の生徒諸子に望む』（1939年）に、五十六の想いが残されている。

「私は諸君に対し、銃を執って第一線に立てとは決して申しません。あなた方に希望する所は、学問を飽くまで静かな平らかな心を持って勉強し、将来発展の基礎を造って頂きたいと熱望する次第であります」

（出典＝現・長岡高校所蔵『和同会雑誌92号』所載の講演録に基づく）

令和５年５月29日～６月５日

こもれる魂魄の地を訪ねて（第54回）

東北・北海道の旅

杉本順一

その６ 摩周湖を見たい

６月３日（10時20分）屈斜路プリンスホテル出発。（11時00分）レストラン摩周で昼食。「ニシン」が好きな小生もニシンの大きさにおめる（＝臆する⇓怖めず臆せず）。気温は11℃。食堂のおばさんも「今日は北海道の人間でも寒いですよ」とのこと。摩周湖を目指すも霧の山道は視界10メートルほど。恐る恐る進む。

（12時10分）摩周湖第一展望台駐車場へ。受付のおばさんが「きれいな言葉で言いますと、これが霧の摩周湖です」とニッコリ。眼下には本当に摩周湖があるのだろうかと思ってしまうほど……。「心がきれいなら見えます。心眼で見てください」とも。運が良くないと摩周湖は見られないのかな？

（12時40分）硫黄山到着。アイヌ語で「裸の山」を意味する「アトサヌプリ」と呼ばれる硫黄山、山肌からはゴウゴウと音をたてながら噴煙がほとばしり、周囲には硫黄独特の臭いが立ち込める。硫黄山のトイレの注意書きには「この山（アトサヌプリ）は常時観測されている活火山です」とあり、噴火の際には硫黄山レストハウスの地下室に避難するように書いてあった。

その名の通り良質な鉱山資源である硫黄の豊富な山。明治期にはマッチや火薬の原料として、また外貨獲得の手段としても硫黄は注目を集めていた。

アイヌの人々が硫黄を焚き付けに使っていたことを聞きつけた釧路の漁場持（松前藩よりアイヌとの交易権を委託された商人）の佐野孫右衛門が、政府の許可を受け本格的な採掘を開始したのが明治10年。そこから３年がかりで輸送路を開拓し、明治16年には全道一の採掘量を上げるほどの一大事業へと成長を遂げる。

その後、明治20年に採掘権は安田財閥の祖、安田善次郎に移る。安田は釧路集置監の囚人たちを使って、わずか８ヶ月で標茶（現・川上郡標茶町）までの鉄道を敷設させ、硫黄の大量輸送の道を切り開いた。これにより弟子屈や釧路を中心とした道東の近代化が一気に進むこととなった。

（13時35分）硫黄山出発。屈斜路湖畔を下る。

（14時15分）弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民族資料館到着。同資料館は弟子屈（現・川上郡弟子屈町）付近に居住していたアイヌ民族の資料の収集や研究を目的として作られた施設であり、５つのテーマで４５０点の収蔵品が展示されている。

館内で上映される映画『チロンヌプ カムイ イオマンテ』（短縮版）は、１９８６年に撮影された『キタキツネの霊送り』中のアイヌ儀礼の記録映像を編集した作品とのこと。さっそくこの映画を見せていただくことにした（アイヌ語でチロンヌプはキタキツネ、カムイは神格を有する高位の霊的存在という意）。

１９８６年、北海道屈斜路湖を臨む美幌峠で、大正時代から75年ぶりに行われた「キタキツネのイオマンテ（霊送り）」。我が子と同じように育てたキタキツネを、神の国へ送り返す儀式の詳細が映し出される。祭祀を司るのは、明治44年生まれで当時75歳の日川善次郎エカシ（アイヌ語で長老の意）。祈りの言葉を間違えれば神の怒りを買うという大役である。

神の国へ戻った「チロンヌプ カムイ」は人間の国で歓待された様子をみんなに聞かせ、うらやましがられる。仲間たちは肉と毛皮をみやげにして人間の国を訪ねたいと願うのだ、という説明があった。

▼映画を見た感想

犬を飼った経験のある人なら動物がどういう気持ちであるかはその様子から読み取れると思う。映画では送られる狐が語り部となり、「人間がこういう意味でこういうことをしている」と儀式の内容について説明していく。

自分を神の世界に送り返すため人間があの手この手で楽しませてくれるという語り口だが、優しかった飼い主たちがトランス状態になって、自分を打ち付けてくるのを逃れようとする狐の怯えきった表情からは恐怖しか感じられず、ぐったり死にかけた状態からさらに首を丸太に挟まれて絶命させられる狐の運命を思うといたたまれなかった。

そしてその儀式が執り行われている場所が、昨日何も知らず絶景を楽しんでいた、あの美幌峠のあの場所だったとは……と絶句（上映中なので黙って見ていたが、絶句と表現させてもらう）。文化に対しとやかく言うつもりはないが、幼い頃より大事に飼ってきた狐が儀式で送られるのは、「我が子のように育ててきた者からしたら見てられん」という日川善次郎エカシの一言に尽きると思う。

ホテルに戻って〝しめる〟という行為の慈悲や情けについて考える一晩となった、と娘の感想記。

実は、ベッドの中でアイヌの主と名乗られた霊人からの言葉をメモにしてあったが、朝起きてからは嘘のようにすっかり忘れていた。後日つまり６月２日の旅行記を書く時に、メモを見て気が付いた。こんなことを言われていたのか？　と自分で書いたことも忘れていた。

忘れていたおかげで娘たちも先入観なく、この

博物館を自分なりに感じていたことと思う。

（15時30分）弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民族資料館出発。

（19時30分）この日の夕食はホテル内ビュッフェ。60～70代の観光客が多いが、今まで泊まったホテルの中、取り皿に一番食べ残しが多かった。

「神通力如是（じんずうりきにょぜ）」の真意をさぐる　第三十二回

大倭教の源流にさかのぼって

前々回の「神通力如是」の神語りにも日蓮はすでに登場していますが、今回は法主を「第二の日蓮」と呼び、日蓮自身が現界にあった時に果しえなかった使命を法主に託しています。法主はそれに対して「不惜身命」で引き受けることを約束しています。

※「神通力如是」の連載がはじまった頃に、法主自身が記した原本を「原文」として紹介する際の表記の原則について少しだけ説明したことがありますが、その時に伝えられなかった事柄も含めて再確認しておきます。

①原本では神語り以外の説明・解説の文も「カタカナ書き」ですが、読みやすくするために区別して「ひらがな書き」にしています。

②原本では句点〈。〉が書かれていないので、読みやすさのために句点を適宜入れました。

③漢字はできる限り原本のままとし、異体字や俗字、外字の一部など活字書体に含まれない場合は常用漢字に置き換えています。

原　文

（昭和16年11月25日　午後9時半の続き）

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、吾レハ日蓮ナリ。

日聖殿ニモノ申サム、汝第二ノ日蓮トシテコノ末法ノ世ニ出テ、吾ガ永年ノコノ思ヒ世ノ人々ニエトクノ行クヤウ傳ヘ候ヘ。日蓮弟子共側ヘ侍ベラセテ助ケ参ラセ候。何卒日蓮御頼ミ申ス。吾レ世ニ在リシ時蒙①古襲來、今②我ガ日本ハ三方ヨリ攻メ寄セラレ、イツ火蓋ノ切ラレル時ゾ間モアラジ。汝日蓮トシテ眞ノ正法妙法トナヘ、国家安泰ノ祈願ヲセラレヨ。吾レ影ナガラ共ニ唱ヘム。吾③レ日本ノ大船トナラム。吾レ日本ノ眼目トナラム、吾④レ三十二年ノ四月二十八日初メテ題目ロニ致シ候。汝來年ノ四月二十八日ニ大倭鵄杜ニ於テ南無妙法蓮華経ノ第一聲ヲ挙ゲ候ヘ。之レ世界立直シノ第一歩ナラム。オハカリアリヤ否ヤ」

「日聖、心得テ候。前世ノ日⑤蓮ノ説カザリシ所、日聖不惜身命、説キ申シ弘宣流布致サム。御案ジ召サルナ日蓮殿、日聖、大倭日高見國鵄杜ニ於テ上⑥行所傳ノ眞⑦ノ妙法ヲ立テ世直シ致サム。何卒御加護アレ。オ誓ヒ申シ奉ル」

「日蓮。日聖ヨ、カタジケナク　吾レ安堵致シタ。宜シクオ頼ミ申ス」

十一月二十六日　朝八時於鳥見庄山。

朝日ヲ拝セル時。

「天津皇祖

雲ワケテ霊氣ミツル大空ニ、我レ出ズル其ノ時ニ眞ノ妙法立ツ時ゾ。天ノ沼矛ノ立ツ時ゾカシ。アサミドリスミタル心オノガモチ皇祖コノアタタカキ大御心世ノ人人ニ傳ヘヨカシ」

「吾レ　日蓮ナリ。

天津皇祖ニ誓ヒ申サン。吾レ日本（ヒノモト）ノ大船トナラム。吾レ日本ノ眼目トナラム。日蓮慎シミオ誓ヒ申ス、眞ノ妙法立テ候。前ノ世日蓮心ニ残セシコノ妙法、第二ノ日蓮世ニ出テコノ末法ノ世ニ必ズ必ズ一億民八紘一宇ノ人人ニ至ルマデ、眞ノ正法妙法會得行クヤウ傳ヘ候」

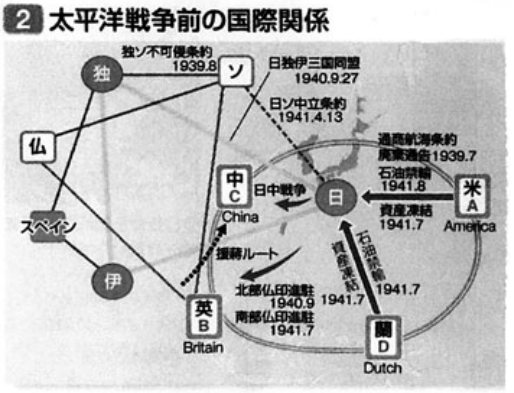
註釈

①蒙古襲来（元寇）

鎌倉時代のなかば、１２７４（文永11）と１２８１（弘安４）の２回にわたり行われた蒙古（元）の日本侵略。文永の役・弘安の役、蒙古襲来ともいい、当時は蒙古合戦、異国合戦と称し、元寇の語は近世代以後定着した。

（小学館　『日本大百科全書』より）

②日本は三方より



（山川出版社　『山川詳説日本史図録』（第６版）より）

③吾レ日本ノ大船ト……眼目トナラム

日蓮は佐渡において自身が法華経に現れる法華経を弘めるために大地から湧きだした四菩薩の中の上行菩薩であるとの意識（信念）を深め、「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ、等とちかいし願いやぶるべからず」（『開目鈔』より）という三大誓願を行った。

④吾レ三十二年ノ……初メテ題目ロニ致シ

建長５年（１２５３）４月28日、日蓮の故郷清澄山の山頂において、大海より昇り来る太陽に向かって立教開宣の南無妙法蓮華経が初めて唱えられた。

⑤日蓮ノ説カザリシ所

『神通力如是』第30回の原文「吾レハ日蓮ナリ……。吾レ妙法伝ヘル時、真ノ妙法ヲ世ノ人々ニエトク出来ルヤウ申サネバナラヌ身ナレド其ノ願ヒ果シ得ズミマカリ候」と日蓮が自ら語られている。

⑥上行所傳

法華経の中で、釈尊から妙法（法華経）を末世の衆生に広めるべき使命を託された四菩薩の代表とも言われる上行菩薩から伝えられた。

⑦真ノ妙法ヲ立テ世直シ致サム

この本格的実践の始まりは昭和20年８月15日の「大倭教の立教開宣」となったと言える。

現代語訳（昭和16年11月25日の続き）

日蓮「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、私は日蓮です。日聖殿にお話し申し上げる。

あなたは第二の日蓮としてこの末法の世に出られ私の永年のこの思いを世の中の人々に納得いくようにお伝えください。私は弟子たちをあなたのそばに置いてお助け致します。どうか（私）日蓮、お願い致します。私が現世におりました時、蒙古が襲来しました。今、私共の日本は三方から攻め寄せられ、いつ戦いの火蓋が切られるのでしょうか。それはもう間もなくでしょう。

あなたは（第二の）日蓮として真の妙法を唱え、国家安泰の祈願をしてください。私は陰から一緒にお唱えします。私は日本の人々を彼岸に渡す大きな船となります。私は世界を見据える日本の目となります。

私は32歳の４月28日、初めて題目を（清澄山山頂において）口にしました。あなたは来年の４月28日（法主32歳）に大倭鶏杜において南無妙法蓮華経の第一声を挙げてください。これが世界立て直しの第一歩となります。わかっていただけましたか」

法主「日聖、心得ました。（私の）前世の日蓮がお話になった事、日聖は不惜身命にて（今世の皆様方に）説き明かし、広く伝え、行き渡らせます。ご心配なさらないでください。日蓮殿、大倭日高見国鶏杜にて上行菩薩から伝わる真の妙法を立てて世直しを致します。どうぞ御加護ください。

（この旨）お誓い致します」

日蓮「日蓮。日聖よ、ありがたいことです。私は安堵しました。よろしくお頼みします」

十一月二十六日（朝８時、鳥見庄山において）

天津皇祖「天津皇祖（奇稲田姫命）

雲を分けて霊気で満たされた大空に私が出てくるその時が真の妙法の立つ時なのです。天の沼矛の立つ時なのです。うす緑に澄みわたる大空の心を自分自身が持って皇祖（法主）よ、この温かい太加天腹大神（宇宙神・宇宙創成の気）の心を世の人々に伝えてください」

日蓮「私は日蓮です。天津皇祖にお誓い致します。私は日本の大船となります。私は日本の眼目となります。私日蓮は慎んでお誓い致します。真の妙法を立てます。前の世で心残りとなったこの妙法※を、第二の日蓮である法主が世に出て、この末法の世の中に必ず必ず日本の一億の民、世界の（すべての）人々に至るまでに、真の正法妙法を会得いくように、お伝えください」

※この部分を「世ニ出テ（原文）」と読めば、「妙法を世に出して」とも読み取ることができる。

あじさい日誌

8月10日　交流の家では午後FIWCの定例委員会を開催。

8月15日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。この日は太平洋戦争の終戦記念日。そして法主矢追日聖が昭和20年8月15日大倭神宮において神命を受け「大倭教」を立教開宣されたことを記念する日です。

8月18日　（旧暦7月15日）東光大祭・祖霊祭の日。

午前11時30分　東方の碑前で祭典開始のごあいさつの後、12時から奥津斎庭で祖霊祭が始められ、その間拝殿においては昭和63年の東光大祭の法主法話の映像を見ていただきました。

この後、祭主を務める教長・家麻呂さんが拝殿に来られるまで休憩。家麻呂さんの到着を待って東光大祭が行われました。

※杉本の私心ですが、この日の法話を見ていて考えました。16日の京都テレビで「五山の送り火」とかいう番組がありました。

京都ではお盆の休みに家族のもとに帰ってくる各家庭のご先祖さんを16日の夜には五つの山々に「大」の字をはじめとする大きな松明をともして先祖さんたちを送り出す慣わしがあります。

法主さんはいつも言われます。現界にいる私たちとその先祖さんたちは、いつも一緒におる。現界人は常にそのことを忘れたらあかんと。

先祖さんを自分から突き放すように考えて生きるのは、どうも先祖さんが気の毒だし、申し訳ないことだと思うのです。

8月20日　岡山県真庭市美甘の大倭会会員・田中一二三さんが帰幽されました。享年97歳でした。同会会員の湯浅芳郎・晴子夫妻のご母堂です。

8月22日　紫陽花邑に「アライグマ」用に捕獲器が設置されていますが、今朝は「お狐さん」が入っておりました。無罪放免です。

8月23日　午後2時から大倭大本宮で月次祭が行われました。

この日は昭和38年8月の法話をお聞きしました。

8月24・25日　田中一二三さんの前夜祭並びに帰幽祭が真庭市の「やすらぎホール久世」で行われ矢追家麻呂さんを始め大倭関係者9名が参列しました。

8月26日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

8月28日　11時すぎ奈良県桜井市の佐久間裕樹さん、京都市上京区の冨永吏葉子さん、同北区の宮尾稲穂さんが来邑され、杉本順一さんと歓談しました。

9月4日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

9月6日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

この日は昭和25年にご帰幽された妙月かあさんのご命日です。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

8月24日　夕方から大倭安宿苑運動場にて菅野台の夏祭りが開催されました。職員も事前準備や後片付けをお手伝いして、地域の方々と交流を深めました。

9月6日　大倭安宿苑会議室にて今年度2回目の新入職員研修会が行われました。

（菅原園）

8月17日　午後から2階交流ホールでコスメサークルを行い、ハンドクリームを使いながらのマッサージを行いました。

8月26日　午後から会議室で音楽療法を行いました。声を出す練習をしたり、皆で歌を歌ったり楽器を鳴らしたりと楽しい時間を過ごしました。

（須加宮寮）

8月15日　昼食時、祭りの雰囲気作りを行い、たこ焼き・焼きそば・焼き鳥・かき氷とお祭りメニューで、数名の女性利用者が浴衣姿も楽しみました。

8月22日　単独水害避難訓練を行いました。

（長曽根寮）

8月22日（デイ）　フロアに提灯をつるし、法被と鉢巻き姿で夏祭りを行いました。射的やスーパーボールすくいなどで遊び、おやつにかき氷やたこ焼きなどを食べました。

8月24・27日（特養）　フロアにて夏の風物詩の飾り付けを行い、職員がかき氷機でかき氷を作り、好みのシロップで味付けをして食べました。

（茂毛路園）

8月30日　午後より定例懇談会を開催しました。参加された方が「甘い物が好き」という事で「秋のスイーツ」のお話をしました。

（八重垣園）

8月28日　美容師の方2名に来ていただき、髪の毛のカットをしてもらいました。

大倭会通信

令和6年度第2回役員会（幹事会）が去る7月23日に大倭会館において出席者10名で開かれました。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

10月6日(日)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

10月13日(日)　午後2時より大倭拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）

10月15日(火)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）

10月23日(水)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

大倭会文化講演会

「戦没者遺骨の戦後史～未完の戦争」

日　時　令和6年11月10日(日)
午後2時～4時30分（開場1時30分）

場　所　大倭拝殿　　**入場無料**

講　師　栗原（くりはら）　俊雄（としお）　氏（毎日新聞 学芸部専門記者）

プロフィール:1967年生まれ、第2次世界大戦の元兵士や遺族への聞き取り、戦後補償裁判の傍聴や戦没者遺骨の調査・発掘に加わり報道。「戦闘が終わっても戦争被害は終わらない」と、「未完の戦争」の実態を訴えている。『東京大空襲の戦後史』『硫黄島に眠る戦没者―見捨てられた兵士たちの戦後史』など著書多数。